



Data

監督: ドメ・カルコスキ

脚本: デヴィッド・グリーンソン/スティーヴン・ベレスフォード

出演: ニコラス・ホルト/リリー・コリンズ/コルム・ミーニー/パム・フェリス/アンソニー・ボイル/パトリック・ギブソン/トム・グリーン=カーニー/デレク・ジャコビ

■■■ショートコメント■■■

◆私は、ジョン・ロナルド・ロウエル・トールキン原作の『指輪物語』を映画化した『ロード・オブ・ザ・リングー旅の仲間ー (第1部)』(01年) (『シネマ1』29頁)、『ロード・オブ・ザ・リングー二つの塔ー (第2部)』(02年) (『シネマ2』54頁)、『ロード・オブ・ザ・リングー王の帰還ー (第3部)』(03年) (『シネマ4』44頁) を、『シネマルーム』の出版を始めた頃に、年に1本ずつ続けて観たのでよく覚えている。この3部作は壮大な叙事詩で、戦闘シーンも大迫力の楽しい物語だったが、何しろ長かった。他方、『ホビットの冒険』を映画化した『ホビット 竜に奪われた王国』(13年) (『シネマ32』未掲載)、『ホビット 決戦のゆくえ』(14年) (『シネマ35』未掲載) もファンタジー色溢れた冒険物語だったが、こちらはイマイチの感があつた。

小説は大きく、自らの体験に基づいて書く「私小説」と、完全に頭の中の想像だけで書く架空の物語に分かれる。近く公開される『人間失格 太宰治と3人の女たち』の原作である『人間失格』は前者だし、『ホビットの冒険』や『指輪物語』は後者の典型だ。しかし、トールキンは『ホビットの冒険』や『指輪物語』のファンタジーの世界を、どんな境遇の中で生み出したの?それが本作のテーマだ。

◆『ホビットの冒険』や『指輪物語』のような壮大な冒険物語が生まれたのは、「カマケがえのない愛と友情、そして勇気から!」。それが、そのテーマの答えらしいから、本作は必然的にJ・R・R・トールキン (ニコラス・ホルト) が大学に入ってから、トールキンと3人の親友との友情物語が基本軸になる。そして、そこに絡んでくる女性がエディス・ブラッド (リリー・コリンズ) で、時代的背景として襲いかかってくるのが第1次世界大戦での塹壕戦への従軍だ。

本作では、劇作家志望のジェフリー・スミス（アンソニー・ボイル）、画家志望のロバート・ギルソン（パトリック・ギブソン）、作曲家志望のクリストファー・ワイズマン（トム・グリーン＝カーニー）という3人の男とトルキンとの友情が詳しく描かれる。トルキン以外の3人はそれぞれ才能と野心に溢れた青年だが、ハッキリ言って同時に彼らはお金持ちのボンボン。奨学金をもらってやっと大学に通っているのはトルキン一人だけだ。そんな立場（身分）上の相違があったため、4人そろって学生時代特有の「ご乱行」を続けている中で、トルキンだけが受けた“処罰”とは・・・？

◆本作に見るエディスは、ピアノの演奏家を目指す、トルキンより少し年上の女性。彼女もトルキンと同じく、フォークナー夫人（パム・フェリス）の家に下宿しながら夢の実現に向けて努力していた。そんな女性にとって、トルキンやトルキンのグループが好ましく見えたのは当然だし、トルキンにとってもトルキンの文学の話聞いてくれるエディスの存在は当然恋の対象になったはずだ。そして、3人の友人たちもその恋の成長と成就を当然のように考え、温かく見守っていた。

他方、若くして亡くなったトルキンの母親からトルキンの後見人を頼まれていたフランス・モーガン神父（コラム・ミーニイ）は、規律に厳格で色恋沙汰にはあまり理解を示さなかったから、「トルキンが成年に達する21歳まではエディスとの交際は禁止！」と厳命。さあ、トルキンはどうするの？

本作中盤では、4人の男たちの友情物語と並行してトルキンとエディスとの恋物語が描かれるが、意外にそれは平板。あまり劇的な展開にはならないから、アレレ・・・もともと、それは本作が史実を踏まえたもの（？）だから仕方なし・・・そう考えて納得していたが、いざ第1次世界大戦に出陣していくシークエンスになると、俄然劇的な展開になっていくので、それに注目！

ちなみに、エディスを演じていたリリー・コリンズは、本作では時々メチャ美人に見えるので、それにも注目！

◆第1次世界大戦の塹壕戦を描いた名作には『西部戦線異状なし』（30年）の他、『戦場の馬』（11年）（『シネマ28』98頁）、『戦場のアリア』（05年）（『シネマ33』214頁）等、たくさんあるが、そこでは塹壕戦の悲惨さと非人間性が最大のポイントになっている。しかし、そんな悲惨な現実だって、見方によってはファンタジーに・・・？

幼い頃に父を亡くしたトルキンは母と弟と共に美しい自然に囲まれた英国のセアホール・ミルで暮っていた。そこでの生活は苦しかったが、母は想像の翼を広げて物語を創作し、心を豊かにする術をトルキンに教えてくれていた。そのため、トルキンは樹木や草原そして、美しい山や空を見ながらさまざまな空想を膨らませながら、さまざまな物語を作っていたらしい。そんな少年時代は私も少しダブるが、トルキンの場合は第1次世

界大戦の塹壕戦の中で空想力をさらに高め、場合によれば、兵隊を焼き尽くす炎がドラゴンの口から放出される炎に見えたらしい。すると、人間の神経をマヒさせる恐ろしい毒ガスの煙は何に？また、たくさんの枝を張って立っている大木は何に？

中国ではドラゴン（竜）は神獣・霊獣であり、皇帝のシンボルとして重要な役割を果たしている。しかし、ヨーロッパではヨーロッパ文化の中で共有されている伝承や神話における伝説上の生物だ。したがって、第1次世界大戦の塹壕戦の中でドラゴンの姿を頭の中に描いていたトルキンの想像力はすごいし、そんな悲惨な体験から『ホビットの冒険』や『指輪物語』の壮大な物語を創作した構想力もすごい。

さらに、そう考えると、彼の『ホビットの冒険』や『指輪物語』は先ほど分類したファンタジーではなく、ひょっとして体験談に基づく私小説・・・？

2019（令和元）年9月5日記